「論文作成」のための特別講座　　練習問題９

次の資料をよく読んで、印象に残ったところをあげて、あなたが考えることを５００字以上、６００字以内で作文しなさい。ただし、作文には、「共に生きる」、「障害」、「学ぶ」の３つの言葉を必ず使用すること。

【資料】

誰もが普通と感じられるように

愛媛県西条市立東予東中学校二年
稲井　大雅

先日、僕は風邪をこじらせ、緊急で総合病院へ行く事になった。待ち合い室には、車いすの子、耳をふさいで泣き叫ぶ子、その場をぐるぐる回ったり、ぴょんぴょん飛びはねたりしている子、ずっと一人言を言っている子、奇声をあげている子達がいた。その日は発達外来の日だった様だ。僕と同じ様に、緊急で来た子が、待ち合い室の光景を見て、自分の母親に言った。

「変な子がいっぱいいて怖い。」

どうやら、一般には、奇妙な光景に映る様だ。僕にとっては、不思議なものでもなく、ごく当たり前の光景であると言ってもいいぐらい特に気にもならなかった。なぜなら、僕の弟は「自閉症」だからである。

自閉症とは、生まれつきの脳の障害であり、治る事はない。ひとくくりに自閉症といっても、僕達にそれぞれ個性がある様に、その特性は一人一人違う。弟の場合は、言葉がしゃべれない事もあり、周囲とのコミュニケーションをうまくとる事ができない。自分の要求が伝わらないと物に八つ当たりしたり、かんしゃくを起こしたりしてパニックに陥る。又、表情や声などから、相手の気持ちを読みとる事ができないので、過剰に接触したりして相手を怒らせ、よくトラブルを起こす。家族の僕でも、今だに理解できない行動が沢山あり、つい怒ってしまったり、きつく言ってしまう事がある。だから、自閉症を知らない人達があの病院の待ち合い室での光景を、「変な人がいっぱいいて怖い。」と思ってしまうのも仕方がないのかもしれない。

わが家では、弟雄斗のサポートブックというものを用意している。いわば、「雄斗取扱い説明書」だ。その中には、雄斗の特徴・クセ・コミュニケーションの取り方・様々な場面での対応の仕方を具体的にまとめている。例えば、コミュニケーショ

（裏面に続く）

ンの取り方だと、こちらの意志を伝えるのは、言葉で言う、紙に書く、手話やサインなどを使う事。本人の意志を伝えてもらうのは、五十音表やコミュニケーションブックを使う事等を、細かく説明してある。

僕達家族が今の家に越して来た時に、父と母は地域の人達に、このサポートブックを配った。雄斗という存在を理解してもらうためだという。地域の人は意外にも関心を示してくれたそうだ。

「雄斗君にどうやって接したらいいかわかりました。」

と言ってくれた人もいたそうだ。最近は、近所の子達が、

「雄斗お兄ちゃん遊ぼう。」

と誘いに来てくれたりもする。五十音表の付いたコミュニケーションブツクを首にさげて、嬉(うれ)しそうに外にかけ出す弟を見ると、何だか僕も嬉しくなった。もちろんトラブルが無い訳ではない。自分より小さい子達を相手に、かんしゃくを起こしたりもする。そんな時は、トラブルの原因は何か、本当はどうすればよかったのかといった事を紙に書いたりして、弟がわかりやすい様に説明する。納得(なっとく)すれば、さっきまでのパニックがうその様に落ち着くのである。

今、弟は「地域」という小さな枠(わく)の中であるが、「自閉症」という障害を抱(かか)えながらも、生き生きと生活している。ここでは、弟を見て、「変な子」「怖い」「かわいそう」という人はいない。それは、周囲の人達が、弟を理解しようとしてくれているからである。

発達障害を支援している先生の言葉の中に「見方を変えて味方になろう」という言葉があった。まさに今の弟にぴったりの言葉だと思う。自閉症を知ってもらうためにサポートブックを配り、弟を連れて、どんどん地域に参加した。その甲斐(かい)あって、障害に対する見方が変わってきた。自閉症の特性を少しずつ理解してくれる人ができた。そして、その人達が味方になってくれた。だから、弟は、この地域で生き生きと生活していられるのである。

障害を持つ人が生き生きと生活するためには、周囲の人の理解がなければならない。弟もこれから成長するにつれて、今の小さな地域をとび出していくだろう。その時に、自閉症という障害がもっと認知されていてほしいと思う。あの病院の待ち合い室の光景が、ごく普通のものであると感じられる様になっていてほしい。

原典：内閣府「**心の輪を広げる体験作文入賞作品**」平成24年度入賞作品集　pp. 7-8より
原典には、読みがなはない。学習のために倉橋が読みがなを付けた。

「論文作成」のための特別講座　　練習問題９　解説

資料読み取り型の作文問題である。資料の中からメッセージを読み取って、そのメッセージ(問題提起)に対して、自分の意見を説明することが求められている作文問題である。

ただし、作文には、「共に生きる」、「障害」、「学ぶ」の３つの言葉を必ず使用することが求められている。

書き方の公式は、標準的な「資料読みとり型小論文」の構成(段落構成)を使えばよい。

第１段　資料文からの「引用」

第２段　「問題提起」＋「判断」

第３段　「根拠」

「答案」を書くテクニック

第１段の「引用」の場面で、論じる対象を明確にすえること。たとえ、長文でもかまわないので、正確に文を写すことが基本である(勝手に省略したり、言い換えないこと)。

そして、とりあげた段落のメッセージについて「自分はどう受け止めるのか」を書くことが大切である。

第２段で、「問題提起」として、自分は障害者に対してどんなイメージを持っていたのかを説明すること。そのイメージが「誰もが普通と感じられるように」の作者の思いとどのように違ったのか。あるいは、自分の経験と同じように感じ取ることが出来たのか。「誰もが普通と感じられるように」を読んで自分の生き方や、障害者に対する意識について新たに感じたことを説明する。

次に、これから自分がしなければならないとか、したいことを「共に生きる」や「障害」との関係で自分の思いを書くことが大切である。

第３段では、「共に生きる」ために、自分が今後に取り組むべき方法を具体的に説明すること。その際、今の自分でできることと、将来身につけたい力量・知識・技術との間の距離を説明し、自分の「学ぶ」課題を明らかにできれば高い評価が与えられるであろう。

※　採点基準

個人の「人生感」を採点することはできない。したがって、何を生き甲斐と感じるかなどの内容そのものを採点対象にはしない。

しかし、「課題設定力」と「表現力」及び「論理力」は、採点対象とすることができる。

この問題の採点基準は、10点満点として考えると次のような配点になる。

①　「誰もが普通と感じられるように」が伝えるメッセージ(障害を克服する戦いの厳しさ、支援してくれる人への感謝、共に生きたいという願い)を説明している。(2点)

②　障害者と周囲の人達とのつながりについて、「誰もが普通と感じられるように」を読む前と読んだ後での自分の考え方の変化などについて具体的に書いている。(2点)

③　自分の克服すべき課題を、「共に生きる」「学ぶ」を使って説明している。(2点)

以上の①～③を書いていることと、指定の文字数で書いていることが最低条件である。

次に、加点対象として、

④　自分の目指す「共に生きる」方法について具体性がある。(2点)

⑤　キーワード(生き甲斐、社会参加など)を効果的に使用して、説明している。(2点)

これら以外に、論理矛盾は、減点対象とされるので要注意である。